
異世界が来たっ！～俺と少女とファンタジー～

らいなあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界が来たつ！～俺と少女とファンタジー～

【Zコード】

Z90710

【作者名】

らいなあ

【あらすじ】

異世界に行くのはもう古いつ！

これからは、異世界が来る時代だ！…………えつ？

逆に古い気がしないでもない。そんなもんぶつ壊せ！

【あらすじ】

世の中が詰まらないと感じる大学生。

「面白いこと起きねえかな？」それが口癖の青年はある日、異世界に行く
ではなく！何と異世界がやってきた！？

青年が住む町の上空に地球に似た大地が！そこから降つて来たのは
……………ドラゴン！？ゴブリン！？天使にサキュバス！？極め付け
は剣に魔法！？しかも 美少女！？

基本的に主人公視点です。

〇つめー プロローグっ！（前書き）

おはにちはーらいなあです！

今回は学校に行っている間に考えた異世界モノです！

異世界モノと言っても異世界に行くのではなく、異世界が来る！？

という作品になります！

警告としては、投稿は不定期になる予定ですので悪しからず。

ちなみに誤字脱字等の問題があればご報告いただければ対処します！

同時進行の「夢も希望も絶望すらない現実」もよろしくお願ひします！

〇〇めー プロローグー！

こんな話をして誰が信じるだらうか？

突然空に見たことも無いような地上が出現し、重力に引かれ合つた惑星は段々近づいてきて。

そんな中、その地上から桜色の髪の美少女が降つて来たなんて…

誰が信じるんだ？

俺は空の地面を見上げて、そこが異世界の惑星だと認識するのに時間は掛からなかつた。何故ならその地面に… 魔法を見たからだ。いや、それだけじゃない。

ドラゴンがゴブリンがサキュバスが天使が剣が魔法が落ちてくれば、誰だつて空の地面は異世界の惑星だと思えるはずだ。もしそうじゃなくとも、ゲーム好きの俺には異世界にしか見えなかつた。

本当に誰が信じるんだ？こんな話？そう思ひながら、俺は無意識に手を伸ばしていた。異世界に？違う。ドラゴンやゴブリンに？違う。天使やサキュバス？違う。剣でも魔法でも無い。

桜色の髪の… 少女に。

空から降つて来るモンスターや異種族、武器や魔法何かじゃなく、同じ年ぐらいの少女に俺は手を伸ばしていた。別に犯罪目的じゃない。可愛いからじゃない。ただ… 何となく。

俺には、異世界やモンスターなんかより、その少女のほうが真っ先に視界に映つたんだ。

そして俺の思考を全て持つていかれた。

『あの子を助けたい』

ただその一点に。そうしたら後は素早い。少女が落ちてくる場所に向けて駆け出していた。

両腕を少女に向けて、顔を上げたまま、一直線に。物が有るとか、モンスターが落ちてくるとか、剣が落ちてくるとか、そんなことは考えなかつた。

それよりも、あの子を助けたい——ただそれだけで何でも出来る気がした。運すら味方につけたような、多分そんな感覚。

そしたら難なく辿り着けた。何の問題も無く。何も落ちてこじずに。

俺はそれが何でかも考えないで、ただ少女へ両腕を伸ばしていた。それに少女は返してくれたんだ。両腕を俺に向けて、満面の笑顔で。

意味が分からぬよりも先ず、笑い返していた。満面の笑顔で。そして少女は俺の腕にスッポリ収まつたが、俺は踏ん張りきれずに仰向けて倒れてしまう。

幸い地面は芝生だつた。怪我も無く、一見すると地面に寝転がっている俺の上に、少女が身を預けているような、カッフルみたいな図になつていいことだらう。

大丈夫ですか？少女が俺に聞いてくる。俺はそれに……ああ、大丈夫だ。そう笑つて返した。

〇つめー プロローグっ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

御意見御感想をお待ちしています！

1つめー 異世界が来たつー（前書き）

お楽しみください

1つめー 異世界が来たっ！

朝起きてもやる事無くて、たまに大学行くけど面倒くさくて。そんな毎日をダラダラと過ごしながら、俺は時々思っていた。

「ああ～。面白～」と起きねえかな～」

すると右横から、またそれ?ーーと呆れた様に望んでも無い返答が返ってくる。

「あんた毎日それね」

俺の顔を覗き込むように顔を近づけ、明らかに馬鹿にしたような表情で俺を見る女性。

はつきり言ってウザイッたらありやしないんだが、これが昔世話になつた恩師の娘となれば話は別だ。嫌々でも付き合つていかなければならぬ。

たとえば俺の顔を覗き込む彼女。名前は……宮坂英理子と叫んだのか？愛称はエリー。

彼女の親には借りが有る。幼い頃、両親が居なかつた俺を引き取つて、ここまで育てくれた恩が。

そんなことで、エリーとは幼馴染的な付き合いで収まるわけだ。これでエリーと縁を切つてみろ、たちまち俺の財産は底を突いて、借金まみれの苦学生になつてしまつだ。

「しょうがないだろ。つまんねえんだから」

だから俺は今日も、ウザイと言わずに普通に付き合っている訳だ。

「これから大学行くのに?」

大学だつて好きで行つてゐる訳じゃない。エリーと、彼女の両親による強い説得のせいだ。

初めは面倒臭いから働くつもりだつたのに、三人の強い説得に俺が折れる形で大学に行く事になつた。望んでもいのに。それから早一年、俺は十九歳になつても変わらず面倒臭がり屋だ。

「面倒臭いからな」

面倒臭いから詰まらないと言いつつも、内心では少し楽しみだつた。

何たつて、俺たちが通う春桜大学しゅんなんおうの学食は、トップクラスの味を誇つてゐる。大学に行く楽しみと言えば、学食置いて他に無い。だからこの大学への道が堪らなく好きなんだ。学食食いに行くぞー！ーーつていう感じがするからな。

「またにやけて…………どうせ学食でしょ？」

ギクッ！何で気付かれた！？…………あつ、にやけてつて言つてたな。俺つてそんな顔してゐるか？

ふと視線をズラしてショーガラスを見るが、まつたく顔に変化はない気がする。

「何で分かつた？にやけてなんかいないうだろつ

エリーに視線を戻して問いかけると、彼女は一コツと笑つて溜息ためいきを吐いた。

「何年一緒に住んでると思ってるの?」

十五年

俺は即答する。そりゃあ忘れてないけど。いくら十五年同じ家に住んでいたって、分からぬものは分からぬだろ。つい一年前までは同居していたとはいえ、ねえ。

とは言われても、なあ。俺にはエリーの細やかな表情変化は見抜けないぞ？女性限定なのか？

歩くスピードを速めた。

「お、おー！」

小走りで俺の前に出たエリーは、振り返つて八つ当たり気味に怒鳴り散らす。

「うつさい！ 一人暮らしでもしたから感覚が鈍つたんじゃないの！
? 司郎！」

そう言つて彼女は、逃げるよう走つていつた。

俺はその背中に向け手を伸ばしたまま、呆然と立すくめているだけだった。

「何なんだよ……」

呴く言葉は虚空に消え行く。後に残つた俺が惨めに感じた。
みじ

何なんだよお前が何を知りませんか

それが俺……鳳司郎が一、二年振りに大声を出した瞬間だった。

——大学の帰り道。まだ夕暮れと言うほどでもない午後。エリーに見捨てられた俺は、結局一人で帰る羽目になってしまった。おかげで商店街を歩く俺の足取りは——とてつもなく重い。あんな軽口叩き合っている間柄でも……いや、だからこそ、ケンカした後は気分が悪くなる。それを明日に持ち越すなんて在り得ない。

だが結果として持ち越すことに成りそうな事に、複雑な感情が渦巻いていて、それが足取りを重くさせている原因なのかもしね。

「はあ、飯買つて帰るか」

溜息一つで気分は——当然の如く——良くならず、とりあえずいつも買っている弁当屋で晩飯代わりの弁当を買つのだ。

「いらっしゃい！司郎君」

いつものように俺の名前を呼んでくれる弁当屋の女将さんには、いつも違つ弁当を頼む俺。

いつもは焼肉弁当だが、今日は豚カツ弁当にしよう。そう決め、かなりボリュームのある豚カツ弁当……五百円を女将さんに頼み、しばらく待合室のベンチで待つ。

何とかこの暗い気分を打破しようと——去年一人暮らしする際に
買って貰つた——スマートフォンをポケットから取り出し、エリー

にメールを送る。

『朝は俺が悪かったよ。頼むから機嫌直してくれー！』

タツチパネルって早打ち難しいよね。そんな事を考えながら待つていると、数分ぐらいで返事が来た。

『では許して進せよう。…………駅前のティーガーデンで五百円×三日分で』

『あー？ 五百円って馬鹿にしてるのか！？ んなもん法外過すぎるわー！』

返信の文章を見た瞬間、鬼気迫る顔でそんな文章を書き込んだ俺が居た。

すると今度は数十秒くらいで返信が返ってくる。息を荒くしながら本文を開くと、そこには――

『じゃあ許さん。反省するべし』

――と書いてあった。はああああああああああー！？ 何、するべしつて！？

口には決して出さず、まるで銀さんみたいな感じで心中シッコリを繰り出していく。

「司郎君、出来たよ」

文句のメールを送りつけてやろうか等と考えていた俺の耳に、女将さんの出来た宣言が届く。じょうがない、今回は許してやるか。――と、許してもらいう立場の筈の俺はその時思っていた。

女将さんから弁当を受け取り、財布から五百円玉でそれを支払う。

「いつもありがとうね」

「お互い様です」

俺は財布をしまい、女将さんの笑顔に見送られて弁当屋を出た。まだまだ青い空が澄み渡る頭上に、俺は少し気分が良くなつていった。若干スキップ気味に歩いていると、いつもの分岐点に差し掛かる。右行つても左行つても同じような時間で着くからな……。

今日の気分的には左だな。別に大した理由が有る訳でもないが、このあまり大きくない四季美町で言えば、道によつて大きく景色が変わつてしまつ。

たとえばここを右に曲がる。すると東京程ではないが、そこそこ大きなビルが立ち並ぶ駅前通りに出る。ならば左はどうか？ そうすると田畠や住宅が並ぶそこそこ田舎の風景が見えるのだ。

だから今日の気分は左。田舎の風景を見ながら帰りたかったからだ。

「はあ、面白いこと起きねえかな？」

俺的には普通のペースで。しかし普通の人から見れば少し速いぐらいのペースで、俺は左の車道を歩いて行く。その途中で、いつも見ている公園が視界に入った。

芝生（雑草？）の生い茂つた、遊具が全然無い公園だ。有るのはベンチと滑り台と精々ブランコ。

俺は視界の端に公園を捉えつゝも、いつもの様に通り過ぎようとした。しかし――

「ん？ 何だあれ？」

――公園の中心の丘の上に、何か良く分からぬ劍みたいなのが刺

さつていたのだ。

子供の忘れ物か？ そう思いながら田の上まで行くと、その剣が放つ重圧が物凄いことに気が付いた。

「な、なんだ……！」

あまり装飾のされていない、西洋風の剣だった。そこまでは普通のおもちゃ屋で売っているだろう。しかし、その剣は口かつたのだ。
刃先はさきから柄頭えがしらに至るまで。

そして何より、刀身の輝きがおもちゃで出せるクオリティを超えている。まるで本物のようだ。——本物見たこと無いけど。

俺はその剣を取り、試しに引き抜いてみる。

誰かの忘れ物だつたら交番でも届けなきゃな。———それだと俺捕まるんじゃねえか？

そんなことを思った瞬間、右手に持つた白き刀身の剣はその身を輝かせ、まるで太陽光を鏡で反射している様な光で辺りを包み込む。それが数十秒程続いたかと思つたら、その剣は光を徐々に弱めていつた。

「……っ！ 何だつたんだ？」

光が收まつた頃、眩まぶしさで閉じていた田蓋まぶたをゆっくりと開ける。右手の剣を見ると、そこには何にも無かつた。——いや、正確には十字架……というより剣の様なペンダントが右手に收まつっていた。そのペンダントは淡い光を放ち続けている。

「何だこれ？ 剣は？」

公園内を見渡してみるが、白い剣はどこにも無かった。

しょうがないからペンドントに視線を移す。それは光を放つ不思議なペンドントだった。

まさかこれに?——いや、それこそまさかだ。俺はペンドントを放ろうとするが、手から離れた瞬間にペンドントは俺の右手に戻つてきていた。

「…………おいおい」

もう一度やるが、結果は同じ。ペンドントを見つめて問いかけた。

「お前はあれか? キング ムハーツのキーブ ードか?」

だが当然返答は返つて来ない。やべえ、頭がパニッシュだ。ゴチャゴチャになりそうな頭で思考するが、何一つ良い案が浮かばない。

そしてペンドントを見つめていると、不思議と吸い込まれそうな感覚に陥る。

白銀の美しい剣を模つしたペンドント。それが俺に言つてくる気がする。

『われを汝なんじが望む場所に掛けよ。さすれば扉が開かれる』

俺はその言つがままに首元に掛けた。するとペンドントが一際強い光を放ち、唐突に鎮まつた。

首元に掛けたペンドントは光を発さなくなり、不思議な感覚は露と消えまる。

「取れねえし」

ペンドントを外そ^うとしても、全然外れなくなつてゐるし。多分、俺が首を切らないと取れないんぢやないかなあ。——と冷静に（やけくそになつただけ）分析してみたり。

しょうがねえ。とりあえず腹減つたし帰ろつ。これはその後だ。

——と決めて振り返つた時、上空から違和感を感じて空を見た。

「えつ？」

そんな馬鹿みたいな咳きをもらしてしまつほゞ、上空にあつたのは驚愕だつた。

そこにあつたのは——

——地面だつた。

「ええええええええええ！」

何と上空の遙か先、多分大気圏前辺りから、もつ一つの地球が俺たちの地球を覗いていたのだ！

「どゆことー？どゆことー？」

錯乱状態で頭を抱えて上空の地面を見ていると、ふと何氣なく氣付いた。

「あれ近づいてない？」

間違いない。さつきより近付いて来ている——えつ？ あれ衝突するの？

焦りと不安からジタバタする俺の田辺、さうに驚愕のモノが降つ

て来るのが見えた。

「ド、ドリゴン！？ゴブリン！？天使に悪魔……といつよつサキュバス！？」

ゲームとかで見た様な風貌のそれらが、俺たちの地上へ向けて落ちてくるのだ！

ドガーン！ドガーン！そんな音を鳴らしながら地上に降り注ぐモンスターたち。そしてさらに極め付けは——

「剣！？魔法！？危ないって！！」

それこそＲＰＧとかで見たような剣に、明らかに火球とか雷撃の様なモノが降り注ぐ様は、さながら地獄絵図だ。

そんな中——

「あれは……」

とある一つのモノに眼を奪われる。というかモノといつより者だな。

それは桜色の長髪をした、真っ白なドレスに身を包む少女。スカイブルーの瞳（何故か見えた）に、頭にちょこんと乗ったティアラ。まるでどこかの国の姫様だ。

それを思った瞬間に、俺はもつ駆け出していた。意味も分からず。何となく。

そして俺は彼女を受け止め、大丈夫だ——そう言つて笑っていた気がする。

1つめー 異世界が来たつー（後書き）

いかがでしたでしょうか？

これでプロローグに繋がるわけです。

御意見御感想をお待ちしています！

2つめー お姫様が来たっ！（前書き）

お楽しみください

2つめ！ お姫様が来たっ！

少女を抱きかかえたまま、腕の痺れからしばらく横たわっていた青年が居た。俺なんだけどね。

流石に高所からの落下を簡単に受け止められるほど、俺は優れていないし。——でもいくら少女とはいえ、あの高さから落下した人間を受け止めてこれで済むはずが無い。

「君、何かした？」

ほとんど勘だが、異世界から落ちてきたのなら特別なモノでも持つているのではないか？——という、現代からしたら完全に頭が痛い事を、その落ちてきた少女に問いかける。

「はい！ 重力魔法の瞬間的無重力を！」

何言つてゐるのか全く分からねえ。ただ無重力という単語が出てきたから、多分俺が受け止める瞬間にそれを発動して、俺が受ける衝撃を軽減させたのか？

じゃあ、ティアラが落ちなかつたのも魔法か？……凄いな魔法つて。

一人関心しながら、腕の痺れが引いてきた事を感じ、そろそろ立ち上がろうとする。——その前に。

「立てる？」

少女は俺の意図に気付き、すいません！と言つて急いで立ち上がつた。別にもう少しそのままでも良かったのに。俺は残念ながらもゆっくりと体を起こし、立ち上がろうとして手で何かを踏んでいる

事に気が付いた。

「ああ！俺の豚カツ弁当！？」

今まで全く気に掛けてなかつたが、俺はずつと豚カツ弁当を持っていたのだ。剣を見つけた時もそう。頭上に異世界が現れた時もう。少女を受け止めた時もそう。

となれば今の豚カツ弁当の事情は悲惨ひさんだろう。こんな風に中身は出でないけど弁当箱の中はグチャグチャみたいに成る位なんだから。

「晩飯オブザデッドーどうすつかな……」

頭を抱えて悩んでいる俺に、それならーーと少女が提案してくれる。

「何かお作りしましょうか？」

「マジで！？」

弁当屋で見せた奴と同じ、銀さんノリで、少女を見つめる俺。少女は、はいっーーと笑って、豚カツ弁当を拾い上げる。

「これは私が頂きますね」

「いや、駄目だから」

「ええつ！？」

新鮮な驚き！？普通分かるだろーーーといつシッコ!!をグツと堪え、俺は立ち上がりて豚カツ弁当を取り上げた。

「腹壊すぞ。止めとけ」

少女は渋々（しぶしぶ）、豚カツ弁当を諦めてくれた。本当に黙りだから。

そこまで言った所で、自己紹介して無い事を思い出し、俺はその節を説明して語る。

「俺は鳳司郎。大学生だ」

すると少女は、ポカンとした表情で首を傾げた。

「おおと・つしろ?」

「おおとつ・しきり!」

発声が難しいのか?でも今まで普通に会話していたぞ?しかし少女はポカンとしたまま、またもや言った。

「おおとつし・ろう?」

「わざとやつてないか……!?」

そうとしか思えないほど、少女は的確に俺の名前を間違えている。その後何回か訂正させたものの、結局は変わらず、俺が折れて呼び名はシローになつた。

「私はヴァルキュリア公国第一公女、リリーシア・ディ＝マリア・ヴァルキュリアです」

「第一公女!?お姫様だったのか!?」

「言つてませんでした?」

「言つてない!」

まさかこの少女が姫様だったとは。いやまあ、頭にティアラ乗つてるからやうじやないかな~とは思つていたけど、公国公女とは

分からなかつたぜ。

しかし、リリーシア^{ディ}＝マリア・ヴァルキュリアか……。聖母^{マリア}の名を冠するとはな。そしてヴァルキュリア。昔見た書物で、ヴァルキュリアの語源の何たら語（名前忘れた）では、戦死者^{ヴァルキュリア}を選ぶ者と意味されていたらしい。戦死者^{マリア・ヴァルキュリア}を選ぶ聖母か。何か物騒だな。

「よし、リリーシアだな」

「はい？」

「リリーシア^{ディ}だと長いだろ？だからリリシア。ひょつとして怒つた？」

いきなり失礼すぎるか？とも思つたが、彼女は驚く位笑顔になつた。

「いいえ、怒つてません。素敵な名前をありがとうございます」

「う、うん」

後から聞いた話だが、何でもリリシアは渾名^{あだな}を付けられた事が無いらしい。身近な人には何時もリリーシア^{ディ}やマリアと呼ばれていたとか。だから渾名に憧れていたんだそうだ。良く分からん。

だけど彼女つて不思議な感覚するよな。姫様の割には親しみやすいし。何でだろ？

「どうかしました？シローさん」

「いや、何でも無い」

彼女の声を聞くとどうでも良くなつてくれる。まあいつか。分からなくて、これから死ぬわけじゃないし。——これから？——ああ！彼女を助けたは良いけど、これからどうすれば良いんだ？

「リリシアはこれからどうするんだ？」

「わあ？」

やべえ、いきなり壁にぶち当たった。警察に保護して貰つか？——それは止めとこ！。何されるか分からねえし。だつて魔法使うんだぞ？何されるか考えたくも無い。

「とりあえず俺の家来る？」「はー！」

ええー！？即答ですかー！？少しも躊躇わないとー？この少女、手強いぜ。

何が手強いのか良く分からぬいが、とりあえず聞きたい事も有るし、一旦俺の家へ行こ！何もしないよ？

「あの、シローさん」「ん？どうした？」

様子が可笑しいリリシアは、後ろ……とだけ呟くと、少し後ずさつて行つた。

俺は言われた通り後ろへ振り向く。——と、全高三メートル程の真っ赤な鱗を持つドラゴンさんがこちらにしゃこました。

「ドゥラマゴン！？そこや落ちてきてたなーー！」

驚きから膝カツ弁当が手から落ちてしまつ。俺は構つもせずに、ドラゴンを視界に捉えつつ、リリシアと同様に後ずさつて行く。

「リリシアさん？」れを何とかする魔法はござこませんでしようか？」「

「無い事も無いですけど、町が……」

「じゃあ止めよう。」

「我が身可愛さに町を吹つ飛ばしたら只事じゃねえぞー！でもビリする？」

俺が段々と迫るドラゴンの対処をどうか考へてみると、不意に首に掛けたペンダントが、また光を発しだした。

「シローさんー。」

何故かこのペンダントを知っている様なリリシアの雰囲気に、俺は何も言わずにペンダントを握った。

リリシアがこれを知っているのなら丁度良い！後で聞き出してやるー！

「悪いが、見逃してくれないか？」

しかしジドリゴンは嫌だとばかりに咆哮し、閉じた口から炎を見せ。閉じてもはみ出て来る炎ってRPGっぽいな。

「まあ、見逃してくれないよね」

仕方が無い。そう呟き、右手で握り締めたペンダントをより一層強く握る。すると、ペンダントを沿う様にオレンジ色の透けている鎖が首に現れた。

「ロックチャーン
護封器石……」

リリシアが驚きの声音で呟いたのを背に、首を覆つ鎖を引き千切るとしてーー

「切れない……」

「それはそうですよ。封印解除してないですか？」

——冷静に突っ込まれてしまった。そういう物なの？
そんな状態でもドラゴンは口内に炎を溜めている。デカイ奴が来るぞ！

俺があたふたしてゐる中、リリシアは小さく何かを呟いていた。そして考マジックスペルえが纏まつたのか、うん……と頷くと、今度は声量を大きくして呪文を唱え始める。

『我われ、汝なんじが源たる血を受け継ぐ者なり。我が呼び声に答えよ』

言葉を紡ぐ度、ペンドントの鎖の拘束力いとうそくじゆりょくが弱まつていく。鎖と鎖の間に隙間すきまが出来ていき、その隙間を埋める様に青白い光が発光し出した。

『スケーブゴート仮封私承』

最後の呪文スペルを唱えた瞬間、オレンジ色の鎖は轟音じうおんと共に弾け、青白い光はペンドントを握つた俺の右手に集まる。————行ける。と同時に炎を溜め終わつたドラゴンは、俺とリリシアへ向けて前足を踏み出した。準備はOKって訳だ。

「顕現せよ」

ドラゴンは口を開け、辺り一帯を包める量の炎を俺たちへ向け噴き出した！

時間がゆっくりに感じる。死ぬ前は世界がスローモーションに見

えるといつけど本当だつたんだな。でもまあ、死ぬ気は無いけどね！

炎が俺たちへ届くより前に、俺はペンドントを引き千切り、眼前に迫る炎へ突き出した！

「！」これ……」

炎を遮るように突き出されたペンドントは、その形を変え、ドラゴンが放つ炎を欠片も残さず吹き飛ばす。俺の右手にはペンドントでは無く、全てが真っ白な剣が握られていた。

「聖劍……」

後ろのリリシアが正体を明かしてくれた。「！」これが聖剣か！うつひょー！――ゴホンゴホン！誰でも子供の頃の夢が叶つたらこうなるよね。

しかし本物の剣は重たいと聞いたが、この聖剣は全然重くない。空に成ったペットボトルを持ったのと何ら変わり無い重さだ。これなら俺でも扱えるぞ！

聖剣を両手で構えて、足に力を込めていく。聖剣が発する光が白から黄金に変わった瞬間、刀身を包む様に黄白色の粒子が展開した。

「これ必殺技の流れじゃね？」

衝撃波でも出るんだろうつか？期待に胸を膨らませ、聖剣を地面に落として俺の右後方に持つてくる。刀身を包む粒子が光を発した時、脅威を感じ取つたドラゴンがノーモーションで火球を吐いてきた。

「俺の必殺技パート1……！」

どこぞの仮面つけたライダーみたいなセリフを口走った後、眼前に迫る火球へ聖剣を揮つた。右下から左上への遅い斬撃。少しでも戦い慣れていれば簡単に避けられるほどショボイ攻撃だった。しかし聖剣を左上まで上げた瞬間、聖剣が迫ってきた軌跡をなぞる様に光が生まれ、次にはそこから膨大な量の黄白色の粒子が迫ってきた火球を消し去る。

その粒子は辺り一帯を包み込みながらドラゴンに迫り、粒子が触れた翼、足、手、頭の順に光に変えていく。全ての粒子が通り過ぎた時、ドラゴンは辛うじて保っていた体を全て光に変えた。

「すげえ……」

そう呴いた時には、前方に居たドラゴンは跡形も無く消え去つていたのだつた。

放った粒子も上空に飛んでつて、人知れず霧散する。後には聖剣を持った俺とリリシアが残つていた。

「よし、光の奔流撃と名付けよう」

さつきのに技名付けてた。俺は聖剣を右手で持ち、振り返つてリシアへ問いかける。

「リリシア大丈夫……か

「は、はい……」

リリシアを見た刹那、俺の全身を衝撃が駆け巡つていく。そんなまさか。

彼女は先程ペンドントを拘束していたオレンジ色の鎖に、全身をグルグル巻きにされて、縛られていたのだ！

「リリシア……」

「はい……」

「写真撮つて良い？」

「黙ります！」

怒られてしまつた。でもそつと、さつきリリシア仮封私承スケーブゴートつて言つてたもんな。スケーブゴートつて生贊いけにえとかつて事だから、ペンドントの封印をリリシアが引き受けたんだな。

『ハンド私承終了』

恥ずかしさからかリリシアは直ぐに嘔嘔えると、ほとごど無くなつた拘束を解く。すると聖剣はペンドントに戻つて、俺の首元へ独りでに帰つて行つた。

「ああ……。やつぱ戻るのね」

ちよつと残念と嘆か。トラブルが回避出来そうな気がしたんだけどな。もう巻き込まれたけど。

「シローさん、お弁当……」

「ああー。」

またやつちまつた。知らず知らずの内に弁当落としてるじ。そしてドラゴンの炎で消し炭になつてゐるし。某上条さんじやないけど不幸だ。

「まあいいけど、疲れた」

リリシアから色々話を聞きたいけど、今はこの疲れをどうにかしたい。とりあえず帰ろう。そう心に決めた俺だった。

2つめー お姫様が来たっ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

途中から眠気で何書いてるか分からなくなってしましました。
でも一応まとめた気がします。次回はリリシアさんにお話でも聞きましたよ？

御意見御感想をお待ちしています！

さつめー 超展開が来たっ！（前書き）

お楽しみください

3つめー 超展開が来たつ！

「ただいま

「お、お邪魔します！」

誰も待つてはいるはずが無い薄暗い部屋に一つの声が木霊する。俺

とリリシアだ。

俺は手探りで壁のスイッチを見つけるとそれを押して電気をつけた。

「おおつー！」

何を感じてこらるのか、リリシアは明るくなつた電球を見て眼を輝かせている。

「ひょっとして向こうには電気は無いのか？」

「はい。大体ロウソクで……」

便利な事だけじゃないんだな、魔法があるつて。

俺はリリシアを上がらせ、伴つてリビングに向かう。途中、玄関の電気は全部消していく。

「何故消すんですか？」

リリシアは本当に何も知らないようだ。俺の懐事情を分かつてくれよ。

「金掛かるからだ

「へえー」

新鮮な驚きだな。当然か、向こうには科学なんて無いもんな。リビングのドアノブを捻りつつ、自分で独りでに納得する。ついでに側のスイッチを押して電気をつけた。

「そこら辺に座つてな。飲み物持つてくれるから」「はい！お手数お掛けします」

キッキンに行き、冷蔵庫から作り付けの麦茶を取り出す。それから食器棚のコップを二個取つてリビングに戻つた。

「……つて、何やつてるんだ？」
「そこら辺に座つてろと言われたので……」

リリシアはソファが有るにも拘らず、律儀に正座で床に座つていたのだ。

「俺の言い方が悪かつた。ソファに座れ」「はい！」

そう言つとようやくソファに座つた。色々と面倒臭い少女だ。言い方次第で何でもするんじゃないか？…………何もしないよ？

「麦茶だけど良かつたよな？」
「大好きです麦茶」

なら良かつた。リリシアの斜めに位置するソファに座つて、二つコップをテーブルに置く。両方に麦茶を注いで片方をリリシアに渡し、もう片方を持って麦茶を飲んだ。そして減つた分を注ぎ直して、麦茶の容器をテーブルに置いた。

「それで、話を聞かせて貰おうじゃないか」

「チップを両手で持つて可愛らしく麦茶を飲んでいたリリシアは、一旦飲むのを止めて、二口二口しながら俺に視線を向けた。

「はい。どの辺りからお話をしたら良いのでしょうか？」

そう言われても良い様に最初の質問は決めてある。

「じゃあ…………スリーサイズは？」

「上から〇、57、91です」

答えるのー？開口一番のボケが流されてしまったー…………そういうやリリシアってこんな子だよな。会つてから一時間も経つてないけど何となく分かる。

「冗談を本気で答えないでくれ…………」

「冗談だったんですか？」

ハ割本気だけど。見ればリリシアは精神的ダメージは皆無な様で、二口二口しながら麦茶を飲んでいた。結局俺が損したのか？いや、スリーサイズを聞けたからキャラにしよう。

「遊ぶのはこれ位にして、先ずはひとつアレがここに現れたのか教えて貰おうか」

無意識に頭上を指して異世界である事を示す。リリシアは簡単です。一一と胸を張つて即答した。

「繫がつたからですよ」

「繫がつた?」

一言だけで理解できるほど俺の頭は優れてないぞ。と言いたくなるが、続け様に説明しようとしているみたいだから言わないで置こう。

「基本的に世界が繫がるとは、送信者と受信者が必要なんです。今回の場合には送信者である私と受信者であるシローさん」

「何を持って受信者とするんだ? 俺は何も受信してないぞ?」

「受信と言つてもこちらの世界で言つ電波? とは違います。送信者が渡りたい世界に契約使物を送るんです」

物品契約か。俺はそれを受け取つたが為にこちちに異世界を呼んでしまつたのか。

本当ならお前頭大丈夫か? と言いたくなる様な話だが、現実に遭遇したしなあ。信じたと仮定して話を進めるしかないだろう。

「じゃあそれが、俺の持つているコレか?」

ある程度は推理出来る俺の性質を最大限に生かした結果、予測としては受信物は聖剣の事ではないか? という結論に至つた俺。首のペンダントを持ち上げてリリシアに問いかける。

「はい。私が居た世界……アクシオン=ディフォリアでは四聖剣^{ヨーダ・オブ・フォース}四大元素剣^{ド・オブ・フォース}の光属性の聖剣、『エクスカリバー』と……『聖剣』エクスカリバー』……ねえ」

在りがちな名前だな。しかも四大元素剣^{ヨーダ・オブ・フォース}つて……。RPGでは定番だよな。もうちょっと設定変えられなかつたのか? まあ現実にあ

る世界に設定変えろって言つのも無理な話だが。

「ていうか何でそんな物を送るんだよ」

「一番近くに有つたので」

「おばちゃんか！ 一番近くに居たからそれ取つて。じゃねえんだぞ！ ？ 聖剣を粗末に扱いすぎだろ……。いつか罰当たるぞ。」

「ん？ ジヤアリリシアが落ちてきた時に笑つていたのも……」

「シローさんが聖剣を持っていたのでつい」

「俺がリリシアを助けたいと思つたのも……」

「受信者は送信者に必ず出会いついでプログラムされています。思考に改变をして」

「マジで？」

「ええ、マジで」

なるほど道理で。これでほとんど疑問は解けちまたな。

俺は麦茶を口に含む。リリシアも同様に麦茶を飲んでいた。当たり前の様に場が静かになる。

ん~他に聞きたい事有つたかな~？ ……アレか？

「ひつなつた仕組みは分かつた。でも送信者が受信者の世界に行くといつなら分かるが、何で世界じと一緒に来るんだ？」

問い合わせると、リリシアはコップから口を離して返答してくれる。

「それは簡単です。生物単体での空間及び時空の転送は不可能だからです」

テレビーション

「ん？ つまりは……」

今の話から推測するに瞬間移動には何か特別な条件が必要で、生身の肉体ではそれは出来ない。

「惑星は送信者を送る箱舟みたいな物か？」

「そうです。馬車や家等では耐え切れないでの世界」と

何て厄介な代物だ。——ていつかそれなのに何でリリシアはコッチ来たんだ？

「屋敷の書物にこちらの世界の事が描かれていたので行って見たくなりました」

俺の思考を悟ったのか彼女はそんな事を言つていた。行つて見たくなつたからつて来るか？普通？…………普通じやなかつたな。

「ああ！ それよりも…………！」

「それよりも、つて…………」

「ほらこの通り……。リリシアは何か思い出した様子で俺のペンダントを見る。

「まだ本契約して無いですよね？」

「本契約？」

「この子は意味を知つて言つてるのだろうか？ エンゲージの意味。婚約だぞ？」

多分、いや絶対婚約の事を言つてる訳じやないだろうけど、傍か
ら見ればプロポーズと何ら変わりないだろ？

はた

「迷路地図」の題名が、この絵本の題名である。

契約吏物

「
契約を同
エンゲー

ジリンクス る証明物を使って行うんですよ

「それをするといざなうんだ？」

ふとした興味が俺を襲う。リリシアに問いかけると、彼女は一瞬ながら答えてくれた。

「送信者の存在を固定するんですよ。時間が経つと離れて行つてしまつ世界同志を繋ぎ止めて置くんです」

「ふうん。それが本契約か」
ヨウケイ

ちゃんとした理由も有つたんだな。一人関心に耽っていると、リリシアはそれと――と、とても大事な続きを言ってくれた。

「いやうらの世界の婚約と同じ意味もあるんですね。」
エングージ

「はあ？」

「何も知らない送信者をサポートしてくれ、あわよくば受信者の方
で種を存続させる。言わば本契約は夫婦の契りと同じ意味もあるん
です」

…… そうだつたのか）。知らなかつたよ）。H A H A H A）。
…… つて、はああああああああああああ！？

「心の中で。」

3つめー 超展開が来たっ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回も説明回になりそうですね～。

御意見御感想をお待ちしています！

4つめー 選択肢が来たっ！（前書き）

お楽しみください

4つめ！ 選択肢が来たっ！

「君はそれで良いのかよ！？」「
はい、覚悟して来た事なので」

何てコッタ。突然やつて來た美少女が結婚してくれと言つてゐる。
ああごめん、ちょっと端折り過ぎた。正確には——

——異世界からやつて來た姫様が——

——かくかくしかじかで——

——俺と婚約することになつた——

説明する氣無いだろ？ そう言われそうな文章だな。ごめんなさい。
つまり要約すると——

——いつひの世界にやつて來た異世界を存在し続けさせるために
——契約途中だつた儀式？を完成させる必要があるのだが——
——その儀式を終わらせるには俺とその姫様が婚約紛いの事をし
なればならない——

——とこう事らしい。さっぱり分からん。

俺は勢い余つて立ち上がつた体をもう一度ソファに落とし、落ち
着いてこの状況の突破口を探る。

落ち着け。リリシアはそう言つ意味も有ると言つただけで直接的に
&実際に結婚するとは言つて無いだろ。だったら本当に夫婦にな
らなくても良いんじやないか？ そう言つ道を取つた人も居れば取ら
なかつた人も居て当たり前だろ？ フツフツ。本^{エジゲージ}契約の弱点見破
つたり。

俺は麦茶を一飲みしリシアに向かひ。彼女も同様にしていた。

「本契約はしたとする。でもそれをしたからと言つて実際に夫婦になる訳じゃないんだろ?」

リシアは桜色の長髪を弄り出して言つぱりそつに視線を逸らす。

「そうですが……過去の例では全件そういつ仲に……」

「思考の改変?」

「はい……」

せつときあわよくばつて言つてなつたつけ! ? オワタ! 確実にオワタ! 頭の中まで変わつたらどうしようも無いじゃないか!

「でももしかしたら100%じゃないかもしませんよ?」

リリシア、それは慰めにはならない。覚えておくと良い。

「どうか何故彼女はそこまでしてコッチの世界に来たかったんだ? よつぽどの思いが無けりや、知らない奴といきなり婚約は出来ないだろ?」

「リリシアはどうしてそこまでここに拘るんだ?」

直前まで考えていた事を吐露すると、リリシアは俯いてボソボソと小さく呟く。

「私は生まれてから十八年間、ずっと過保護に育てられました。外にも行けず、自由な時間も無く、寂しい毎日だつたんです。でもある時、屋敷の書物の中に地球の本があつて……。本の様子は……楽しそうでした」

ヤバイ、予想以上にヘヴィーだ。俺の手に負えない。

しかし、彼女の真摯な思いには、いくら俺だつて心がブレない訳が無い。

「それで？」

「はい」

くつ、そんな顔で見られたら俺の良心がガリガリ削られて行くじゃないか。

彼女の覚悟の入った凜とした表情に心が奪われて行く。せめてと最後の理性で少しだけ抵抗した。

「少し考え方をしてくれ」

リリシアはちよつと残念そうな顔になつたが、直ぐに表情を戻して、今日中に一一と言つた。

それが期限だらう。息抜きついでに彼女を家に残して近くのゴンビニに行く。

家を出た途端、ファンタジーな世界に若干驚く。そういうや忘れていたが、異世界から落ちて来たのはリリシアだけじゃないんだよな。

「はは、本当に何だコレ？」

前方の横切つて行く皮膚が緑色のゴブリンとか、地面に刺さつた剣とか、俺にはとてもじゃないが現実に見えない。あるいは俺が夢を見ているのかもしれないが。しかし……

「ああ、分かつてゐるよ。夢じゃないんだろ？分かつてゐるよー。」

横切つて行つたゴブリンが俺の存在を視認した途端、声を荒げて

襲い掛かってきた。手に持ったナイフを振り上げて直ぐに切り掛けつて来る。

俺はそれを左に避けて、カウンター気味に右ストレートをゴブリンの顔面に叩き込んだ。

打ん殴られたゴブリンは半回転しながらコンクリートの塀に衝突し、地面に落ちる事無く一瞬で光になった。武術はやってないから大した威力は無い筈だが……。

五メートル位先の塀に、一メートルに満たないとは言えゴブリンを叩き付けるほどの力は俺には無い。——聖劍エクスカリバーとやらの力か。右手を見れば、少しの光に包まれた拳にくつきりと殴ったかの様な後が付いている。殴った感覚も未だにあった状態で。それらの事がこれで夢じやないと告げているかの様だった。

「はあ、どうなつてんだか」

一応会話上は理解したつもりだが、それでも「現実です」「はいそうですか」とは行く筈が無い。やっぱりどこかで、非現実的な様に思考が拒絶反応を示しているのかもしれないな。

俺はそんな事を考えながら歩き出した。アパートの敷地から車道へ出て、左に曲がる。

ふと空を見ると、近付いて来ていた異世界（アクション＝ディフオリア）がピッタリと停まつたまま動かなくなつていた。それどころか……

「離れて行つてるよな。絶対に」

少しづつだが、確実に距離を離して行つてゐる気がする。あれがタイムリミットでもあるのか。

直ぐ近くのコンビニに辿り着いた時、ちょっとした疑問が頭を過ぎて来た。

何でコンビニ店員や客は平然としているんだ？

自動ドアを潜った所で初めて異変に気がつく。コンビニ内の漏れ無く全員が今までと変わらず普通にしているのだ。外の非日常に気が付いていないのか？

そう思つたが、客の一人が俺を通り過ぎて外へ出て行く。目の前を天使が行き交っているのに、まるで何事も無かつたかのように歩いて行つた。

そう言えばリリシアが本契約^{ハングル}の事をこいつ言つていた。

——送信者の存在を固定するんですよ。時間が経つと離れて行つてしまつ世界同士を繋ぎ止めて置くんです——

『存在の固定』

もしかしたら本契約^{エンゲージ}しないと、モンスターや武器魔法と言つた異世界^{ヒル}のモノも現実化出来ないかもしない。俺が見えたり触れるのは受信者だからか？

ずっと入り口の所に居る俺に不審を持った店員が話しかけてくる前に、俺はコーラと雑誌をレジ^{みやさかえりこ}に持つて行つて会計を済ませる。終わつてコンビニを出た所で、高坂英理子^{みやさかえりこ}……エリーとバッタリ出会つた。

「あら司郎。^{しらる}反省はした？」

「最悪だ。こんなタイミングでエリーと出会つなんて。

「六割七分七厘ぐらい」

「じゃあティーガーデンで五百円×一回ね」

前回から一回減ったのは良いがそれでも高いよ。そつ突っ込むのも何か癪だし、今はエリーに構っている暇は無いんだ。そつと帰ろい。

俺はじやあなたと告げてエリーの横を通り過ぎる。

「待つて司郎」

「何だよ？」

袖を引っ掴まれて進行の邪魔された。用は俺には無いだろうが。何なんだよ。

「あんた面白い事でも起きたの？」

「はあ？」

突然何を言つているんだこの女の子は？

振り返つてエリーを見れば、彼女は分かつてゐわよと言わんばかりの視線で俺に語る。

「大体会つた時はいつも『面白いこと起きねえかな？』とか言つている司郎が今回に限つて言わないなんて…………そつとしか考えられないでしょ？」

「つ！？」「

「どうか。俺、リリシアと出合つてからそんな事一回も言つてねえな。今更気付いた。

俺は心の中でこの事態を楽しんでいる？こんな非日常的出来事を？体が身震いした気がする。鳥肌も立つた様な。自然と口元もにやけて來た。

「司郎？」

エリーが俺の様子に声を掛けてくるが、俺はエリーによつて得た

答えが頭の中で渦巻いている為、何も聞こえなくなっていた。

「 そうだったんだ……」

「 えっ？」

俺は求めていたんだ。こんな非日常を。頭の中で常識人ぶつて、
拒絶をしている様に俺自身思っていた。何が考えさせてくれだ。
これは俺が求めた^{モト}非日常だろうが。記憶が在るだけで十年間、ずっと
と求めていた異常だ^{モト}らうが！

面白くなるなら何でもすると考えていた中学時代。
面白くなるなら死んで良いと考えていた高校時代。
そして今、面白くなる為の最後の扉が目の前に転がっているのに
自分から手放そうとしている。

「俺にはそんな選択は死んでも出来ねえ！」
「 司郎！？」

ヒリーの反応すら耳に届かないまま、俺は一目散に俺の家へ向か
う。

俺は心中で呪文の如き唱えていた。過去の自分に。

『中学＆高校時代の俺！その時の覚悟をもう一度俺にくれ……』

「リリシアー」

家に着き、玄関扉を開けると同時にリリシアと叫んでいた。しか
し返答は返つて来ない。それどころかリビングの電気すら点いてい
ない様だった。

「リリシアーどこ行つた！？」

早々に靴を脱ぎ捨て、足音すら気にせずにドカドカとリビングへ走る。リビングのドアノブを掴んだ瞬間、直ぐに異常を察知した。

「あつつ！？」

ノブから手を放して凝視すると、若干だがノブが赤くなっていた。「ちつ、帯熱してやがる。中ではキャンプファイヤーでもやつてるのか？」

ほぼ確実にドアノブを捻る事は不可能だらう。捻る前に手が焼けるだけだ。

俺は少し後退して距離を取り、一息に駆け出してリビングの扉自体を蹴り飛ばした。飛び蹴りだ。

音をたてて蝶番がぶつ壊れ、勢い余った扉は若干滞空してからリビングの床に転げ落ちた。

「リリシアー！大丈夫か！？」

リビングに侵入すると、異常が異常を呼んで最早奇天烈に成つていた。

ソファやテーブルと言つた家具類は壁に張り付き、十一畳程のリビングの中心に大きな隙間^{すきま}が出来ていた。そしてその隙間に直径二メートル程の紋章が描かれている。俺はそれを知つていた。魔法施行の際、術式を描き現実の世界に現象を促す。名称は魔法陣^{まほうじん}と言つた筈。

その魔法陣に取り込まれるかの如く吸い込まれていくリリシアが、俺の存在に気付き目一杯叫ぶ。

「シローさん！」

リリシアの歓喜の声を受けながら、俺は少しの焦りと大半の勇気を持つて彼女に問いかける。

「どうすればこれは治まる？」

あまり五月蠅くは無いが、いい加減にしないとアパートが壊れそうだった。

故にさつさと收拾させたいのだが、何分自分には魔法知識が無い。ここはリリシアを頼るしかないのだ。

「これは異世界人を押し戻そうとする魔法です！聖剣で効力を弱めた後に本契約すれば治まります！」

つまりは前提として本契約が必要って事か。聖剣はリリシアに解いて貰えれば良い。

見ればリリシアは複雑な表情で俺を見ていた。嬉しさや何かはともかくとして、本契約してくれないんじやないか？とか、見捨てられるみたいな感情が見え隠れしていた。

俺は首のペンダントを掴み、そんなリリシアに思いの丈をぶつける。

「本契約はする。だけど婚約とかは責任を取れない。面白いかどうかは自分で決めるからだ！」

おそらく全ての人があ？と言った顔になつたに違いない。だがこれが俺の全て。面白い事には全力を注ぐのが俺のモットーだ！しかしリリシアはそんな顔にはならず、満面の笑みで笑いかけてくれる。

「はいーシローさん！」

面と向かつて言わると恥ずかしいな。視線を下に逸らすが、ペンダントからは手を放したりしない。

間も空けず、ペンダントを握る右手に力を込める。オレンジ色の透けたチヨーンがペンダントを沿う様に発現する。俺はリリシアに視線を戻し頼む様に言った。

「リリシア」

「はい！」

ドンドン魔法陣に吸い込まれていくリリシアは目を閉じ、先程の様に呪文を唱える。

『我、汝が源たる血を受け継ぐ者なり。我が呼び声に答えよ』

チヨーンが分解されていき、間に隙間^{すきま}が出来てくる。その隙間に青白い光が充満し、拘束力も弱まつた所で止めの様に言い放つた。

『^{スケーブゴート}仮封私承』

轟音と共に弾けたチヨーンを一瞥^{いちべつ}もせず、俺は右手に集まる青白い光を振り払うかの様にペンダントを引き千切つた。そして呪つ。希望に満ちた様な言葉を……。

「顯現せよ」

^{けんげん}

4つめー 選択肢が来たっー（後書き）

いかがでしたでしょうか？

永い序章ですね。自分で書いてて思いました。
夢も希望も絶望すらない現実は今月22日から再開します。是非とも
もじ覽下さい。

御意見御感想をお待ちしています！

5つめー 本契約が来たっ！（前書き）

お楽しみください

5つめ！ 本契約が来たっ！

「顕現せよ」

そう呟き、ペンドントを正面に両手で構える。するとペンドントが柄頭、柄、鐔、刀身、刃先と、聖剣へとその姿を変えていく。全ての具現化が完了した時、聖剣を白き光が包んだ。

「ちつ、光の奔流撃じゃ強すぎるか？」

俺は前回の必殺技について考察してみたいが、少なくとも時間は無い事と家中でする物じやない事は分かる。どうする？

「シローさん！想像です！光は多種多様を実現する無限の粒子です！」

「わかった」

腰ぐらいまで魔法陣に沈んだリリシアが懸命に助けを待つていてのんびりはしてられねえな。

リリシアは想像と言った。光は多種多様を実現する無限の粒子とも言った。―――だつたら狙つた場所に命中する光の矢を想像すれば良いんじやないか？

光の矢が魔法陣だけを穿つ想像。数は―――五。

「名前は無限を穿つ光の剣だな」

矢と剣は結構違うのだが、光にそれは関係無い。

一步踏み出し、聖剣を頭上へ振り上げる。目を閉じて更に想像しやすい様にして。

「頼むぞエクスカリバー」

想像^{イメージ}が固まつた所で目蓋を開き、着弾地点を設定する。

俺から魔法陣を見た時、縦の座標をx、横の座標をyとして、寸法として5の値に設定する。この座標上から見た「x4」「y4」の場所に一本。手前右側の辺りだ。そして「x2」「y3」の座標に一本。「x2」「y2」の座標に一本。左奥だ。ラストに「x4」「y1」の場所に一本。右奥。

設定は終わつた。これを設定するまで実に一秒。凄い早業だ。これで準備は整つた。視界には五つの光の球体が俺の目の前に有る。これが攻撃する矢だ。

「いっけえ！」

全ての準備が終わつた所で聖剣を振り下ろす。やはり遅い袈裟斬^{けさ}り。しかし目の前の球体を斬り付けた瞬間、球体が矢と成つて目標地点へ飛んでいく。矢とは思えないほど複雑な動きで。

飛んで行つた五本の剣は想像^{イメージ}で定めた地点へ向かつて行き、着弾と同時に小爆発が起きる。これも想像^{イメージ}だ。圧縮した光の粒子を外から衝撃によつて辺りへ拡散させ、目標を内と外から破壊する。

「これが無限^{ディヴァイデットソード}を穿つ光の剣だ」

そう言つた刹那^{せつな}、魔法陣がガラスを割つた様な音と共に弾けた。吸い込まれそうだったリリシアが吐き出され、空中を舞う。

「シローさん！」

「リリシア！」

床に落ちる前にリリシアを抱き止め、何とか怪我をさせずにすん

「^{エンゲージ}本契約はどうすれば良い?」^{だ。}

すぐさまリリシアに問いかける。再生され始めた魔法陣があまり時間が無い事を示しているからだ。

彼女は仮封^{スケーフォート}私承^{スケーフォート}を解くと、俺の首に戻ったペンドントを大事に両手で包む。

「私の手の上からペンドントを包んでください」

言われた通りに、リリシアの手の上から両手でペンドントを包み込む様にした。

「次は?」

「最後にどうでも良いので私にキスしてください」

「はあ?」

「早く!」

んぐつー何と言つ究極の選択。^{エンゲージ}本契約^{エンゲージ}つて言つからそんなんじゃないかと思つてたけどさーどこにすれば良いんだ?ーー口は当然却下ーー頬はアレだな。ハズイ。ーー鼻はマニアックすぎるだろ?。どうするか?

「早くしてください!」

「はー!分かりました!」

くつや、無難に額で良いやもつーどうなつても知らねえぞ!

高鳴る心臓を必死で抑え込み、ゆうくりとリリシアの額へと顔を近づける。身長差約十六センチ。額へは簡単に出来るーーが。俺、こんな事した事ねえし!

多分変な汗が背中を伝つ中、俺たち(といつかリリシア)にゆつくつと魔法陣が迫つてくる。

俺の顔はおそらく真っ赤だろ。リリシアも頬を紅潮させ、俺に身を任せる様に目を閉じていた。

『逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ……』

何故か使い古された感が否めない言葉を心の中で唱えつつ、リリシアの額へと段々額を近付けて行く。後十センチ、五センチ、二センチ――零。

俺は彼女の額に軽く唇を当てた。

多分その表現が正しい。リリシアは一瞬ビクンッと驚いた様子だつたが、直ぐに紅潮した頬のまま唱える。終わりの言葉を。

『エンゲージマリッジ
本契約承認』

瞬間、俺たちの手に包まれたペンドントが太陽の如き輝きを発し、俺たちの足元に青色の魔法陣が描かれていく。青色の魔法陣に触れた現存する魔法陣は、さながら砂と成つて風に晒さらされた様に散り、光となつて消え行く。そして部屋一杯に描かれた青色の魔法陣は俺たちを中心に展開された。

『承認した。汝らの存在を固定する』

そんな声が頭の中で響いた時、青色の魔法陣はもう一度俺たちに集まって行き、俺たちの足元を包むぐらいまで小さくなつた。しばらく何も起こらなかつたと思つたら、唐突に魔法陣が上昇して俺たちを調べる様に頭まで上がつて行く。頭上で止まつた魔法陣は、まるで天使のリングの様だ。

そして魔法陣は回転を始め、ドンドン小さくなつたと思つたら

きなり消えた。

「はい、終わりましたシローさん」

ペンドントの輝きが収まつた時にリリシアがそう言つた。なるほど、これが本契約。

俺はリリシアから手を離し、バツが悪そうに視線を逸らす。あんな事があつた後だしな。

というかエンゲージマリッジって単純に読んだら婚約結婚だからね？誰だよこんな呪文考えた奴。

「意外と早かつたな」

現実から逃走を開始する為にリリシアに聞くと、儀式は大体こんな感じです。という返答が返つて来た。そんなもんなのか。

視線を部屋中に向けて見るが、有様は最悪だ。リビング壊滅して

る。

「リリシアはこれからどうするんだ？」

出会つた時にも問い合わせた質問をもう一度問い合わせる。

「私はシローさんと一緒にいます。行く当ても無いです」

まあ当然だよな。今日こっちに来たばかりだし。―――って、待てよ？それってつまり同棲？

「そういう事になりますね」

心を読まないでくれリリシア。マジか！やべえどつこいつ？こんなエリーに見つかったら……！

——司郎、あんたいたいけな少女を連れ込んで何やってるの？最低。
絶交ね——

——って言われるに決まってる！俺、苦学生になる！？大学通つて生活費払つて……無理だ！そんな金ねえよ！！

俺がどうしようか考えているとリリシアが大丈夫ですよーーと声を掛けてくれる。呑気だな。振り返つて彼女を見た。視線を向けられたリリシアは目的が叶つたのが嬉しいのか満面の笑みだった。

「一緒に頑張りましょうシローサン」

彼女の言葉には魔法でも掛かっているのだろうか？不思議と気分が落ち着いてくる。

「ああ、そうだな」

俺も笑い返して一緒に笑つていた。

まあ、これからはこれからだ。ゆっくり考えれば良い。だって俺は最高に面白い事を手に入れたのだから。これまでの分、じっくり楽しんで行こうじゃないか。

5つめー 本契約が来たっ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

一先ず序章を終える事が出来ました。次回からは日常編つて所でしょう。

所でとある読者様から僕が投稿した短編小説の連載版が読みたいと
いう御意見を頂きまして、そちらも考えようと思います。
御意見御感想をお待ちしています！

6つめー 買い物へ行けー (前書き)

おはにちば、らいなあです。

結構な間を開けて申し訳ありませんでした。

不定期とは言えません。

現実の方に引っ張られすぎました。

ようやつと投稿したけど何がある訳でも無いんですけどね。

ではお楽しみください。

6つめー 買い物へ行こー

「ふあ……」

ソファで寝転がっていた俺は身を起こし、寝起きでボサボサの頭を搔く。

今日はリリシアが来て一一日。本契約エンゲージをした翌朝だ。寝起きで寝ぼけたままの田で、今の自分の状況を確認する俺。乱雑に家具が置かれているリビングに、ポツンと置かれた白いソファの上に俺は居た。昨日の後、片付けてないんだよな。

まだ完全に回っていない頭を鬱陶ヒヤヒヤしく思いながら過ハリハリしていくと、リビングの扉が開いてリリシアが顔を出した。

「おはよりやあこますシローさん」
「リリシアか。おはより」

彼女は頭だけをリビングに出し、恥ずかしそうにモジモジしている。

どうしたんだ?見ればリリシアのスカイブルーの瞳ひとみが行ったり来たり忙しそうだ。

「あの……変えの服が無いんですけど」
「どうしたら良いでしょ?」と言つ彼女は自分の服装を見せる為に扉から体を出す。その服装は、
「ぶつ!?

白いYシャツを着ただけで、後は下着しかはいてない様だつた。ヤバイ、鼻血出そう……。ていうか萌える。俺、何でガ

ン見してんだ？

「「めん。それは考えてなかつた」

何分、男一人暮らしなもので。とりあえず極力リリシアを見ないよつにソファから立ち上がると、リリシアを伴つてリビングを出る。

「そつか。リリシアが住む様になるんなら色々必要だな」

全く考えてなかつた。男の俺とは違つてリリシアは女の子だからな。必要な物も多いだらうし。

途中、俺の部屋に入つてタンスから服を引っ張り出す。出来れば男女兼用の方が良いよな。

「これはどうだ？」

ジーンズと無地のTシャツを取り出してリリシアに見せる。

「良いですね」

「んじや、それに着替えてくれ。それと、この後飯食い終わつたら買い物に行くぞ」

気に入つたみたいだし、ジーンズとTシャツをリリシアに渡して俺は部屋を出る。

とりあえず…………飯でも準備するか。俺はリビングに戻つた。

「準備出来たか？」

「はい」

午前10時半。朝食を食い終わつた俺たちは、リリシアの生活用

品を買う為にショッピングモールに行く事になつた。家から徒歩で三十行程の場所にある、四季美モールという所だ。

そこそこ田舎の四季美町には土地が有り余つてゐる。その有り余つた土地を無駄に使いまくつた四季美モールには、ありとあらゆる店が軒を連ねてゐる。

例えばカーショップ、例えばエステサロン、例えばゲームセンターヒーと言つた風に、無駄を詰め込んだような場所だ。しかし何でも揃うと言うのは便利でもある。近場と云つことも幸いして俺はちょくちょく行くんだけどな。

「忘れ物は？」

最後の確認ばかりにリリシアに問いかける。彼女はポケットを引っこり返して持ち物を確認すると頷いて笑顔になつた。

「大丈夫です」「んじゃ行くか」

タクシーにて便利な物を呼べるはずも無く、俺たちは徒歩で四季モールへと向かつた。

その道中、俺はリリシアから色々な事を聞かせてもらつた。

「リリシアって魔法使つてたよな？」

「はい」

「それって俺も使えないのか？」

「もつとも」尤もな疑問だと思う。やっぱ人間誰しも、魔法に憧れるだろ？しかし、リリシアは首を横に振ると、理由を話し始めた。

「それは出来ません。そもそも魔法とは、様々な条件を突破した者

だけが使える物なんです。万象に理念を付加し、描きた空想を具現化する術。それが魔術であり、それを戦闘用に簡易化したものが魔法なんです

「うん、 そうか、 僕が悪かつた」

いきなり小難しい話になつたぞー！ ただよつは、 僕は使えないといふ事だけ分かつた。

もう僕には手に負えない。 話題を変えるしかないだろ。

「ん？ そういうやモンスターは？」

ふと、 昨日から全く居ないモンスター達へ話題を変える。
べ、 別に魔法の事が分からなかつたんじやないんだからねつ！
しかし、 リリシアは笑顔で僕の疑問に返答してくれる。

「本契約は基本的に送信者しか存在を固定する事は出来ません。 そもそも空間及び時空の転送は不完全な魔法で色々問題が生じる場合があるんです。 今回の場合はモンスターの転送。 その生じた問題を解消する為には本契約をするか、 本契約をせずに一定期間過ごす事です」

「つまりは本契約したから問題が消えた……と？」

「そう言つ事になります」

なるほど、 納得。 でも確かに不完全とは言え空間及び時空の転送という魔法が確立していると言う事は、 今まで少なからずは異世界渡航が有つたと言う事だ。 それで起きた問題を解消せずにいたら大変な事に成つていただろう。 それでもこつちの世界に認知されていないのだから問題は解消していた訳か。 関係無い奴には完全に知られる事は無い。 意外と凄い魔法だ。

まあ、これでこっちの世界に危険が及ぶ事は無くなつた訳だ。ゴブリンとかドラゴンとかが居たら死者が出かねないからな。安心安心。でも、前に考えた俺の仮説は少し違つていたのか。ちょっとシヨック……。

「あ、でも……」「……………」

リリシアが思い出した様に何かを語りだす。

「たまに強いモンスター や 次元を超えるモンスター が、弱くな
つた 次元の狭間を超えて 地球 に 来る 事 が あ り ま す」
〔トネリア〕

卷之三

「俺達とても危険？」
「はい。とても」
「ありえねえ……。そんなバカな……！それってようはつまり……」

「 そうしてこちらに来たモンスターは最初は不完全ですが、本契約
主を倒せば現実化しますから 」

ソリシアの手によつて。

嘘だああああ！！それって俺達狙われる要素バリバリじやん！！！

「大丈夫ですよ。シローさんはお強いですの」

「…………はあ」

そうリリシアに言わると大丈夫な様な気がしてきた。
美少女の言葉は絶対だな。…………いや、リリシアの言葉は……
か。

そんな事をしていると、目的地である四季美モールに辿り着いた
みたいだ。

四季美モールの敷地内歩道を歩いて正門へ向かう。ちなみに横の
リリシアはと言つと、

「はわあー！凄くおつきいですう～」

四季美モールが視界に入った瞬間からこんな感じだ。

その表情は子供の様にキラキラして、なんつーか…………めっちゃ可
愛い。

見惚れ半分、興味半分で俺はリリシアを正門へ導く。導くとは、
どこ行くか分からなかつたからだ。

「ちゃんとついて来るんだぞ」
「はーい」

そのままリリシアを伴つて正門を抜けた時、背筋に悪寒が走つた。
それは何故か？それは聞き覚えのある女性の声が聞こえたからだ。
それは忘れられる筈も無い声。十五年間聞き続けた声。その主は、

「し、司郎？そ、その子は？」
「エ、エリー……」

高坂英理子に他ならない。

6つめー 買い物へ行こうー（後書き）

いかがでしたでしょうか？

修羅場？ですね。大変そうです。

御意見御感想お待ちしています！

「つるー H-Cの魔術師ー」（漫畫）

「あらへだくや、おまえもあつまへよ。」
「おまえもあつまへよ。」

「つめーー、Hリーの驚愕っ！」

「しししししし、し同郎ーー！」

「あ、あははー……」

しを言って過ぎだらう。ヒシッコニを入れるより、先ず先行するのはどうしよう。

Hリーにリリシアと一緒に居るところを見られてしまった。それだけでは何も問題は無いはずなのだが、Hリーは昔から俺の周りに居た女性を嫌っている。

思い返せば、中学生の時に仲良くなつた図書委員の子が、泣きながら俺に絶交を突き付けた事があつた。後々、友達から聞いた話だが、Hリーが何かしたらしい。詳細は聞かせてくれなかつたが。ようは、Hリーは俺に女性の知り合いが出来るのが面白く無いらしい。何故かは分からぬ。

俺がHリーを良く思つてないのは、ある意味でもこれが原因のひとつだ。

「あははー、じゃないわよー誰その子ーー？」

さなが
宛ら、彼氏が愛人と一緒に居るのを田撲したかの様な。

正にそんな様子で、Hリーはリリシアを指差したまま硬直していた。

この返答次第で、俺の行く末が真つ暗になるかもしね。ここは慎重に、

「初めまして、シローさんの家に住まわせて貰つていいリリーシアディイと申します」

リリシアが腰を曲げて、とても優雅にお辞儀をなさる。わ〜、流石お姫様だ〜。

リリシアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！！

「えつ？？」

それこそ消え入りそうな声で、エリーは時が止まつた様に凍結してしまつた。

圧倒的な無の時間が、数秒、もしくは数分流れた時、ふと、エリーの両目から一筋の液体が零れ落ちる。

透明なその液体が地面に落ちた瞬間、エリーは何も言わず、何もせず、ただ俺達の横を通り過ぎ、逃げる様に走つて行つてしまつた。

そう思つた時には、時既に遅し状態。俺は、とても大事な物を失つた後だつた。

「シローさん？ 私……」

自分を責める様なリリシアの声に、俺は折れ掛けた心を保つ。

今、俺が折れる訳には行かない。リリシアが自分を責める事がつてはならないのだ。

翌々考えれば、この時の選択はエリーを追つた方が良いんじゃないかと思ったが、それは後の話。この時はリリシアを優先してしまつていた、そんな俺が恨めしい。

「何でも無い。リリシアが気にする事じやないんだ」

こんな事を言つた所でどうにもならないが、もしかしたらこれは俺自身に言つていたのかもしれない。

エリーの反応は、予想以上に俺の心を抉つて行つた様だ。それ故

に出た“他人を思いやる”という行動だったのかも。まあ、全ては後の祭りだ。もつどうじょうもない。

「シローさん……」

「気分がこんなでも買い物を止めるわけには行かないだろ？ 行くぞ」

「…………はい」

リリシアは何か言いたげだったが、今の俺にはそれを聞く余裕は無かった。

「おい」

「なに？」

「何で戻つてきてるんだよ！？」

俺達は四季美モールのフードコート、そのテーブルを囲む様に座っていた。

その中で、俺が一際大きく叫びだす。右隣に座る、エリーに向かつて。

「だつて、二人だけにしたら危ないでしょ？……リリーシア、ディちゃんが

「俺は獣か！？」

エリーは何がしたいんだ！？さっきの今で何で平然としているんだ！？

激しく疑問が渦巻いている。女性と言つのは切り替えが早いと聞いたが、ここまで早いものなのかな？

「良かったですねシローセさん」

左隣のリコシアが小声で囁いてくるが、これは良かったのか？
今のHリーを見ていると疑問が湧いて仕方が無い。

「ああ、行くわよ同郎……」

「どこに？」

「買い物に決まっているじゃないの……」

無駄にテンションも高いし。もうテンションだけなら麻薬中毒者
となんら変わり無いぞ？

そして何故か、Hリーが主導権を握るといつ展開。帰ってくれないかな。

Hリーは視線をリコシアに向けると、満面の笑みで命令した。

「リリーちゃんも行くわよ……」

「リ、リリー？」

Hリーの呼び名に、リコシアは首を傾げた。
そりやあ、いきなり呼べばな。当然と言えば当然だ。

「リリー・シア・ディ・じや呼びにくいでしょ？」

Hリーは、そもそも当たり前のよつな顔をしている。
お前は何様だって。ただしうつのは癪しづくなので、絶対に言わない
けどな。

まあそんなでも、リコシアはとても嬉しそうに笑っていた。

「ありがとうございます……」

姫様であるまじき腰の低さだ。そういうや、俺の時もこんな感じだつたな。

リリシアが魅力的には、この腰の低さからか？姫様とは思えないんだよな。

「じゃあ行くわよー」

ヒリーが先頭をきつて歩き出す。だから主導権を握るな。二回も行くわよなんて言わなくても分かるから！

とは思つても、ついて行くんだけどね。俺、洗脳されてる？

「ヒローさんとシローさんは似ていますね」

俺の横を同じ速度で歩くリリシアが、そんな事を言つていた。それに俺は、

「ビijoがだ！ー」

と怒鳴る。アイツと一緒にされるのは敵わないからな。

しかしリリシアは、優雅に微笑んでいた。……何なんだよ。女性は分からないものだ。

7つのHリーの驚異 - (後書き)

いかがでしたでしょうか？

エリーさん変ですね。どういう心境なんでしょうか？

御意見御感想をお待ちしています！

8つめー Hリーの変化ーー(前書き)

お楽しみください

❀第一回　エリーの変化っ！

「でもまあ、エリーが居てくれて助かったよ。俺じゃあ分からぬ事ばっかりだからな」

「そうよ。感謝しない

何故か主導権を握り、何故か高圧的なエリーに、若干どころじやなくイラつと来たが、それを出すのは止めよう。後が面倒臭そうだ。ちなみに今は、エリーの協力の下でリリシアに必要な物を買い揃えている最中だった。日常的に必要な物はあらかた買った。後は服とかだけだ。

「ありがとうございますシローさん、エリーさん」

と、後ろを歩くリリシアが突然そんな事を言った。まあ、忘れがちだけビリリシアは何もして無いからね。でもそんな事は気にして無いんだけどな。

「気にすんな。無一文なんだからしじうがねえし

「そうよ。どうせシローのお金だし」

おい。確かに俺の金かもしれねえが、元は富坂家の物だろうが。これまた突つ込むのも癪しゃくなので、俺は決して口を開かない。話を変えるが、エリーにはリリシアの事を家出少女と説明した。異世界がどうのなんて話したら、俺は完全に頭がイッちゃった人扱いされるからな。一応、リリシアには口止めをしてるし。ぶっちゃけ、エリー麻薬中毒者（揶揄わざゆです）にイッちゃった人扱いされるのは最悪だ。

「それでもです！」

突然の大声に、俺の思考は中断させられる。声の主はリリシアか。するとリリシアは並々ならぬ思いがあるのか、桜色の長髪を揺らしながら前のめりになっていた。

「だから別に良いって。これも何かの縁だしな」

ハツキリ言つて、ただ面白そつだからって言つるものある。それに俺とリリシアの関係性からもしなければならない事だし。微妙なんだよな。俺とリリシアの関係つて。一般人から見たら同居人と家主。だけど本質的に言えば、送信者と受信者だけじゃないのも事実。そのせいで異世界から危険が舞い降りるんだから、一緒に居たほうが良いし。

なにより、リリシア居ねえと俺聖劍使エクスカリバえねえし。どビのつまり、俺とリリシアは一緒に居るしかないのだ。それなら、俺の性格上、面倒を見てしまうんだよな。損な性格である。

「でも！」

「そんな無限ループはいいから。目的地に着いたわよ」

リリシアがまたも何か言いたげだったのを、エリーがナイスなタイミングで区切ってくれた。俺は今、初めてエリーを見直した。
……多分。

一間開けて視線を店内に向けると、そのままの状態で絶句する。というか固まつた。でも視線の先には服が並んでいるだけだった。女性用の服だけしか並んで無いが、それぐらいなら問題無い。では何故、俺は硬直してしまったのか？

それなら簡単である。何故なら…は、

「まひか………」

女性用下着取扱店ランジェリーショップもあるからだ。

いやまあ、予想はしていたよ。ここにも来るんじゃないつかて。でも、いざ皿にすると本能的に怯んでしまう。これは男の宿命だな。

「し———るひつ」

あつ、ヤバイ。エリーに弄られてしまう。こいつは性格悪いからな。1週間はこの事で弄られそうだ。つまり、これを切り抜けるには、先手必勝！

「どうした？早く行くぞ？」

俺は爽やかな雰囲気をかもし出す。爽やか過ぎてキモイぐらいに。エリーは怪訝な顔で俺を見た後、俺の予想を超える事を言い出した。

「司郎、そんなにランジェリーショップ行きたいの？変態ね

そう来たか！…少しも思う通りに動いてくれない奴だな…！
ただ、焦つて反論したらドツボに嵌はまるのは必至だから、反論するのを止めておこう。どうせエリーだし。

「シローさん……」

「本気にするな……！」

リリシアに勘違いされるのは我慢ならないけどな。とりあえず会話を終わらせて店内に入つてみる。

中は至って普通の店内。白い壁やら普通の棚やら、何も問題は無い。……のだが、

並べてある商品が、ガリガリ俺の良心を侵食していく。大体、商品のピンク率が高いんだよ！

「シローさん？顔が少し赤いようですが……」「氣のせいだ！！」

ふと思つんだが、女性はもう少し俺達みたいな男を気遣つてくれれば良いと思う。何故氣付かない！？それとも面白がつてゐだけか！？

エリーは故意にだが、リリシアは天然だらう。それは分かつてゐるのだが、この状況じゃ愚痴くわちの一つも洩らしたくなる。

「さつと終わらさせてくれ」

しかし、当然の如くエリーは分かつて無い振りをする。
ニヤニヤニヤうざつたいほどの笑みを浮かべ、じつして？
と、聞いてきやがつた。

「今日は大学休みでしょう？」

声のトーンがおちよくなつてゐる！分かつてゐるくせにコイツは！-
エリーに怒鳴らつとして、止めた。エリー麻薬中毒者の対処は無視に限
る。

「まあ分かつていただけども」

服を買いに来た女性の行動なんて一つに決まっている。それによつて起こり得る男性側が被る被害も想定済みだ。遠回しに言つてしまつたが、ようは待たされるのはいつも男性側だと言う事だ。結果だけを直球で言えば、俺はかれこれ一時間はざらに待たされていると言つ事を言いたい。

「エリーで学習済みだ。もう諦めたよ」

ちなみにエリーは、この長々とした買い物術を中学生で身に着けていた。その被害に遭うのはいつも俺、流石に慣れもするさ。

今、エリーとリリシアは試着室に入つたまま、もう十分近く出でこない。ランジェリーショップで一人待たされる男の身にもなれよ。

「まだか？」

「もう少し」

耐え切れず声を掛けてみるが、返答は数分前と全く変わらない。便利だなもう少し。

そして俺は何も言わずに待つている。俺つて損な性格してるよな。自分の残念な性格に嘆息をもらしていると、程無くしてリリシア達が入つた試着室のカーテンが勢い良く開かれた。

「どうーー司郎ーー！」

そんなテンションの高いエリーの声に反応して、面倒臭く試着室の中を見ると、そこには高貴なお姫様が居た。その人が視界に入つた瞬間、俺の思考も体と同様に停止してしまう。

ただ寸前に理解した事だけを記すとすれば、試着室にはとても美しい女性が立つていた。地球では到底ありえない太ももまで伸びた桜色の長髪に、優しげで大きなスカイブルーの瞳。裾にフリルの付

いた純白のワンドピースという、ギャルゲのヒロインですと言つても信じて貰えそうな風貌をしていた。

俺はその美しさに、そして僅かながら内包される可愛らしさに、一時だけ言葉を出す方法を忘れた。意味合いが違うが、今の俺は空いた口が塞がらないを自分の身で体現しているんじゃないだろうか？

「…………」

思考が、贊美している対象の事を理解したのは、数秒経った頃だつた。

俺が、美しい、可愛らしいと思考した対象は、紛れもないリリシアだ。その事をようやくと理解した瞬間、俺は気恥ずかしさからか、視線を少しそらす。

「似合つてますか？」

リリシアは声が不安げで、それが俺の良心を大量に削る。まあ、返答は変わるはずも無いのだから、思つたままを嘘偽り無く吐露すれば良いだけだ。

「に、似合つてるよ」

あ、あれ？ 何故か、とても恥ずかしい。何でだ？

俺は熱くなる顔を冷やすために視線をそらす。でもそれは、リリシア達に表情を見せたくないなかつただけかもしれない。

「ありがとうござります」

安心したような声色で、リリシアは褒められた事への感謝を述べてきた。それが余計に顔を熱くさせる。最早そらすだけでは足りず、

俺は後ろに振り返って、手で顔を扇いだ。

あー、恥ずかしい。何でだ？

「…………

そんな中、何となく、エリーが俺を睨んでいた気が……しな
いでもなかつた。

❀はじめの一歩の変化❀（後書き）

いかがでしたでしょうか？

何かがおかしい？そんな気がするような……。

御意見御感想お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9071u/>

異世界が来たっ！～俺と少女とファンタジー～

2011年9月5日05時50分発行